弘学時報

第 89 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

2022（令和４）年度
9月期学位記授与式挙行

２０２２（令和４）年度九月期の学位記授与式が去る九月二十九日（木）午後二時三十分より本学礼拝堂において挙行されました。

コロナ対策をしつつ、関係学部の教職員の見守る中、厳粛に式が執り行われました。エドワード・フォーサイス英語・英米文学科長の司会により、パイプオルガンの演奏に始まり、楊尚眞宗教主任の聖書朗読、祈祷の後、藁科勝之学長より三名に卒業証書が授与されました。その後学長より卒業生にお祝いと励ましの言葉がありました。

式終了後には、卒業生一人一人に藁科学長・小寺理事長より、またご出席された教職員の皆様から、お祝いの言葉や励ましの言葉が交わされ、ご父母の方々も参加され、記念写真を撮影したり、卒業生の新たな旅立ちを共にお祝いしました。前途に神の祝福がありますよう心からお祈りします。

補助金「教育の質に係る客観的指標」

学校法人弘前学院
学長　藁科　勝之

現在、大学評価へ向けて、次期の認証評価受審への準備を始めております。また、大学評価と表裏一体の補助金の獲得についても、その取組を不断に継続しておりますが、今回は補助金の話をしたいと思います。本学が関わっている競争的補助金としては、「教育の質に係る客観的指標」および「改革総合支援事業」の２つへ応募していますが、今回は「教育の質に係る客観的指標」についてお話したいと思います。

「教育の質に係る客観的指標」は次の４つの評価部門から成り、設問項目は17問あります。

一・全学的チェック体制　①～⑤(⑤問に２つあり、計６問)／二・教職員の資質向上体制　⑥～⑧(計３問)／三・カリキュラムマネジメント体制　⑨～⑫(計４問)／四・学生の学び質保証体制　⑬～⑯(計４問)。以下、全設問を見ましょう。

一・全学的チェック体制　①～⑤(⑤問に２つあり、計６問)…①ガバナンス・コード遵守と遵守状況の点検・公表。②３ポリシーを踏まえた取組の適切性、点検・評価(学外者の参画必須)（条件：毎年度実施)。③全学的教学マネジメント体制構築、３ポリシーを踏まえた取組の適切性と点検・評価の活用（条件：次年度の教育課程編成にかかる取組、点検・評価)。④ＩＲ機能の整備、３ポリシーを踏まえた適切性にかかる点検・評価への活用(条件：学修成果、学修実態等を踏まえる)。⑤情報の公表－学修時間・学修実態、授業評価結果、学修成果／卒業生進路等実績、就職率。

二・教職員の資質向上体制　⑥～⑧(計３問)…⑥ＦＤ(参加率によって評価点上下)。⑦ＳＤ(参加率によって評価点上下)。⑧教員の教育面における評価制度。

三・カリキュラムマネジメント体制　⑨～⑫(計４問)…⑨履修系統図等(カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、科目ナバリング)作成、教育課程編成に係る改善への活用。⑩ＧＰＡ－進級判定・卒業判定・退学勧告、学生自身の学修成果把握。⑪シラバス明記－準備学修、課題・フィードバック、到達目標・成績評価基準、ディプロマ・ポリシーとの関連、科目の位置づけ・ナンバリング。⑫入学前課題、初年次教育。

四・学生の学びの質保証体制　⑬～⑯(計４問)…⑬学修時間・学修行動の把握、教育活動の見直しへの活用。⑭学修成果の把握、結果を教育活動の見直しに活用。－外部の標準化されたテストによる測定(アセスメント・テスト)、学修成果アンケート調査、ルーブリック活用、学修ポートフォリオ。(条件ア：このいずれかの手法。条件イ：学生本人が自己の学修成果を把握できること(無記名式アンケートは不可)。⑮授業評価結果により、授業改善を図るための制度的取組－改善計画の提出、改善を図るためのＦＤ実施等。⑯卒業生への調査(過年度卒業生へのアンケート、就職先への意見聴取)の実施、結果を教育改善へ反映させる仕組み構築。

以上、細かい評価点や獲得点は割愛しますが、本学の達成率は約75％とみてよいでしょう。しかしまだ多大学と比較して見劣りする数字です。参考までに、本年四月初めの教職員集会でも述べましたが、昨令和三年度の実績については達成率約73％でした)。

皆さんの努力のおかげで、達成率が約３％アップしましたが、未実施や不完全達成の克服へ向けて、全学挙げて頑張りましょう。

「ねぷた絵への視座」

看護学部　看護学科　教授　三上　聖治

９月23日弘前学院大学地域文化総合研究所講演会が礼拝堂で行われました。

内容は、本学日本語・日本文学科入江英也教授の「都市礼拝としてのねぷた」、ねぷた絵師野村雄大氏の「ねぷたを見る－絵師の目と観客の目－」、「青森ねぶた全集」編著者の工藤友哉氏の「郷土美術としてのねぷた－青森ねぶたの事例を参考に－」の３題でした。

入江教授は、弘前のねぷたについて、資料を調べていくと、太宰治が下宿していた藤田家の藤田本太郎氏著作「ねぶたの歴史」にたどり着くことの説明をしました。また、寺社が関わらない祭りは珍しく、農村部の一般的な祭りは、仲間内の祭りであるのに対して、町衆が主体で、不特定多数の見物客を意識した都市祭礼の要素が見受けられる祭りは全国的にも珍しいとの見解を示しました。

ねぷたの起源については、柳田國男のいう眠り流しではなく、日本海側で多く見受けられる風流灯篭行事起源の説を支持しているが、灯篭を縦に持って歩く姿は見受けられないという祭りの独自性を紹介しました。

野村氏は、絵師に師事したことがなく、独学で技術を身に付けたとのことであり、下絵もipadといったパソコンで作成し、効率的な作業をしているとのことでした。染料についても独自のこだわりを持ち、食用色素、特に赤や緑は氷水に用いるイチゴやメロンの色を採用しているとのことでした。

また、野村氏は青森ねぶたと一線を画した弘前の人形ねぷたにもこだわっており、今年は平維茂（たいらのこれもち）紅葉狩の場で人形ねぷたを製作したこと、一枚の絵から立体を製作する際の打ち合わせの様子や頭部を合体させるときのお互いの目の位置の確認など現場の苦労を示しました。

工藤友哉氏は北村隆第６代ねぶた名人に9年師事し、高校美術教員を経由して作家に転職してから、ねぷたデータベースを作成するまでの経緯を解説しました。

２０１５年Ｄ社が製作したスターウォーズねぶたが市内を練り歩くことはなかった理由について、他のファラオねぶた、ラブライフねぶた、土偶ねぶたと何が異なったかの建前ではない、現場の事情を解説しました。

「青森ねぶた全集」の進捗状況について、戦後の青森ねぶた、弘前ねぷたは、ほぼ完成していること、今後は戦前のデータや他市町村のデータを補充していくスケジュールと課題について解説しました。

さらに、データベースの機能充実についても多面的な検索に耐えうるような設計であることの説明がありました。

会場の礼拝堂内には、野村氏作成のねぷた絵が展示され、講演会にふさわしい雰囲気が醸し出されていました。

コロナ禍以降、久しぶりに多数の一般市民の参加、活発な質疑応答があり、盛況裡に講演会を終えることができました。

2022年度 1年生特待生授与者

２０２２（令和４）年度の弘前学院大学特待生（１年生）に、10月26日（水）12時より賞状の授与が行われました。今年度の授与者は次の方々です。

◆文学部
１年　板谷　隆広

◆社会福祉学部
１年　木村　美月

◆看護学部
１年　工藤　日陽

研究紹介㊸

それは、研究なのか？

社会福祉学部　社会福祉学科　教授　松本　郁代

「戦前日本の社会事業における地域組織の検討」を研究テーマとしている。それに関連する史資料の蒐集と閲覧が日課となり、これらを読んでいる時が至福の時となった。ただ、研究テーマとは関係のないものも一次史料であれば、蒐集している。最近では、勝海舟に送付された慈善音楽会の招待状とプログラムを手にして、これがなぜ古書店に出てきたのかと考えていた。

この領域については、先行研究が存在していることから、新しい知見を加えない限り、研究とはみなされず、単なる収集癖にしかならない。

では、目下何を研究しているのかというと、研究者としては秘密だが、常に逡巡しており、そのひとつを書いてみよう。

社会事業における地域組織として、セツルメントを研究対象としたことがあった。これは、地域の生活改善を行う社会事業のひとつである。

関東大震災の後に始められた東京帝大セツルメントが、よく知られており、それをモデルにして、昭和の大凶作の際、東北において、農村セツルメントが創設された。その農村セツルメントで、どんな実践をしていたのか、どう組織したのかといったことを調べていくと、この組織に、さらに別の団体が同時に関わっていたことが判ってきた。

最初は、「ん？どういうこと？」と疑問に思ったが、今度はそのもう一つの組織である東北更新会を調べ始めると、さらに財団法人同潤会が登場した。同潤会は、震災後にできた組織であって、近代的なアパートを建設していった団体であり、東北更新会と東北各県の社会事業協会も関わっていたことが判った。

この東京と東北のセツルメントハウスの設計図の原本を所蔵図書館で見ていくと、困ったことが起きた。設計者の氏名が同じであるにもかかわらず、全く違う筆跡のフリーハンドで引かれた設計図が出てきたのであった。これまた「ん？」と思いつつも、ほどなく謎は解けた。

困ったことは、他にも出てきた。それは、農村セツルメントハウスの場所の特定である。青森県に造られたところは、すでに取り壊されて更地になっていた。他県に予定されたもので、設計図は見つかったものの、建設された形跡がないものがあった。「ある」ものを実証するよりも、ないものを「ない」と実証するのは、難しく悩ましい。

談話室

何かに夢中になれるということ

看護学部　看護学科　講師　小野　綾

私はよく学生さんたちに「趣味の無い人は探してでも見つけた方がいいです。」と話している。これは私個人の実体験だけでなく、看護学実習中に見聞きした事や参考書籍にも基づいている。趣味活動は人生をより色鮮やかにし、生きる力の源にもなる。これから社会人になろうとする大学生にこそ『仕事以外にもエネルギーを注ぐ何か』を持つことの大切さを伝えたい。

私たちは人生のうちかなりの時間を仕事に割いている。仕事は生活維持のためだけでなく、自己実現においても大切な要素となり得る。仕事は大切だ。しかし、仕事がうまくいかない、仕事が辛いという状況が続いたとき途端に「人生がつらい」思いに支配されてしまう。そしてそのような状況は案外簡単にやってくる。生活が衣食住と仕事だけの場合、仕事が辛くなると全部辛くなる。仕事以外に『エネルギーを注げる仕事以外の何か』があれば、仕事が辛くてもバランスをとるチャンスが増える。それどころか「趣味のために仕事をがんばろう」とすら思える事もある。

『エネルギーを注げる仕事以外の何か』はどのようなものでもいい。できるだけ夢中になれるものがいいと思う。私は過去に知人から「お金がかかるものじゃないと趣味じゃないよ」と言われた経験がある。当時はあまり理解できずに「そうかなぁ」と少し反論してみた記憶がある。しかしその後、「一理ある」とも思うようになった。趣味のためにお金を稼ごうと思えることも正当な仕事欲といえる。

どんなタイプの趣味であれ、何かに夢中になれる事が大切である。楽しいことに没頭した時間は生きるエネルギーを消費せずむしろ産み出す。明日への活力となる。だからこれから社会に出る学生さんには、仕事だけでなく『何かに夢中になれる』人であってほしい。そして私もそのような人間であり続けたい。（と思い生きてきたら趣味が増えすぎた感も否めない。）

開放講義に参加して

篠崎　珠樹

貴学の開放講義にお邪魔するのは、7回目位になるのかなあ。途中、カルチャー教室や他校のグリーンカレッジ等に寄ったりもしたものの、また舞い戻って参りました。今回は鎌田学先生担当の『日本文化研究A』。福沢諭吉の自伝を教材に思想家の精神的な軌跡及びその時代を共にたどるという内容の講義です。

初めまして。篠崎珠樹と申します。以前は地方公務員、今は痴呆老人ですけど、ささやかな向学心だけは枯らすことをせず持ち続けようと思っています。

若者がそれぞれに学生時代をスポーツに、文化的な活動にと自身を打ち込んで青春を謳歌しているなら素晴らしいし、勉強した時代だったと回顧できる程ならなんとも羨ましい。しかし多くの学生達はそのような記憶を抱えることなく、ふんわりと4年を過ごし卒業してしまうのではないでしょうか。なんとももったいないことに思えます。

学外では講座はどれも、金でそれを買うのですが、大学ではいくら単位を採ろうとも追加の料金等を要求されたり、まして懸命に勉強をしたからといってし過ぎと非難されるはずもない。

にも拘らず講義に出席してて今回も感じるのですが、学生は皆さんおとなしい（音無し？）。先生は、静かな学生から疑問や意見やらを引き出すべく丁寧に講義を進めるのですが、往々にして反応は鈍いまま過ぎます。

私の母校に【半学半教】という言葉があります。先達が常に教える側という訳でなく、他方学ぶ者も同様で、共に教えたり逆に気づかされながら学びあい、啓発しあってさらに深く学んで互いをより高めていこうとする理念と理解しますが、その実践には学生の勉学に対する意欲が必須で、欠けたなら先生も講義を流すようになりがちでしょう。

然るに過去に受講した講義の教師陣にはそれを感じなかった。願うらくは、その思いが教わる側にも伝播して、熱血の授業が学内に遍く展開されますように。

2022年度サークル等活動発表会を開催しました

新型コロナウイルスの感染状況を鑑み、学祭の代替として「サークル等活動発表会」を9月23日（金・祝）に行いました。内容は以下の通りです。

・華道部華展
・文芸誌編集部部誌配布
・国語国文学会展示
・地域総合文化研究所主催「ねぷた絵の視座」

2022年スポーツ大会レポート

学友会執行委員長　須々田　響

今年度のスポーツ大会は本学体育館にて後期開始日前9月24日（土）に昨年度同様、競技参加者以外のマスク着用、換気や消毒の徹底などの感染対策を講じた上で開催した。

今年度は例年と同様に、バドミントン・バレーボール・バスケットボールの3種目と今年度より、団体競技ではなく個人競技の「自転車遅乗選手権」を追加した。

参加人数は例年より少ない約40人だった。参加チームは男女合わせてバドミントンが10チーム、バレーボールが4チーム、バスケットボールが2チーム、自転車遅乗選手権は2人出場した。

ここで各種目男女別に優勝チームとリーダーを紹介する。

バドミントン

（男子）

チーム「ぐし」

看護学部4年　三浦　凌

（女子）

チーム「ひと肌ぬごう」

社会福祉学部1年　平山　櫻

バレーボール

（男子）

チーム「堀川～ず」

文学部2年　山内　泉希

（女子）

チーム「顧我和組」

文学部1年　佐藤　ゆき

バスケットボール

（男子）

チーム「住吉ブラザーズ」

社会福祉学部2年

齊藤　健太朗

自転車遅乗選手権

社会福祉学部2年

木村　心星

優勝チーム・準優勝チーム・3位のチームにはそれぞれ賞金・景品が贈られた。

当日は雨が降っており、少し肌寒く感じられたが、参加した選手はみな汗を流し、のびのびと競技に臨んでいた。参加チーム数は少なかったものの、出場したチーム一つひとつが会場を盛り上げ、チーム色が表れるゲームメイクをしていた。参加している人も、それを応援している人も一緒に楽しい時間を過ごすことができたのではないだろうか。

学友会の大きな行事の一つであるこのスポーツ大会は、スポーツを通して他学部・他学年の学生との交流を深めることができる良い機会である。今後より多くの学生が積極的にスポーツ大会に参加してほしいと願う。

本多庸一先生召天一〇周年の年に
―青山学院訪問記

文学部　日本語・日本文学科　教授　鎌田　学

二〇二二年九月十五日（木）、「弘前学院大学と青山学院大学との連携・協力に関する協定」に基づき、我々は青山学院資料センターを訪れた。この訪問は当初二月に予定されていたが、コロナ禍によりこの九月の実施となった。

青山学院史研究所長の小林和幸教授、研究所助手の佐藤大悟氏、日向玲理氏そして青山学院資料センター事務長の岩本智実氏との懇談の機会を与えられたことは幸いであった。一月以来、本多庸一先生の伝記を使用した勉強会を数回開催した。その時に抱いた様々な疑問に対して、小林教授から直接ご教示を賜ったことは我々にとって大変有益であった。

次に、間島記念館二階にある青山学院資料センター展示ホールを見学した。そこには、本多先生の写真付きプロフィールと書が飾られていた。書はマタイ伝七章十二節の「爾欲人施諸自己　亦當施諸人」であるが、その展示解説に「本多は、求めに応じて気軽に筆を揮ったといわれている。」とあった。彼の人柄が伺える。そして、チャールズ・オスカー・ミラー記念礼拝堂へ入堂することが特別に許された。名は、ミラー夫人の遺志による寄付金で建てられたことに由来するという。陰翳ある堂内は、気高くおごそかな空間であった。

今回の訪問で最も印象的なのは、現在では考えられないくらい、かつて青山学院と弘前学院が緊密な関係だったという小林教授の言葉である。我々の訪問がその再構築の一歩になることを願う。

［付記］

小林教授から頂いた「青山学院一五〇年史編纂報告１　本多庸一関係資料目録」（二〇一七年三月発行）は、外人宣教師館内資料館に保管する予定である。

熱意ある教育者

文学部　英語・英米文学科３年　福士　さくら

今回、青山学院大学を訪問してみて、弘前学院の創設者でもある「本多庸一」という人の偉大さに改めて気づくことができました。彼はキリスト教を通じて熱心に教育を行うことで、学生たちに知識を与えるだけでなく、その人の品性や人格を磨きあげていたのです。

私は彼が携わっていた聖愛高校の出身でもありますが、これまでの生活の中で「本多庸一」という人物に触れる機会はあまりありませんでした。彼がどのような人なのか、何を行ったのか、全く知識がない状態から事前学習をすすめると、彼は最期まで教育に尽力した人なのだと学ぶことができました。しかし、事前学習だけではどうして彼がここまで教育に熱心に取り組んでいたのか等、理解しづらい部分が多くありました。

実際に青山学院大学を訪問してみて、「本多庸一」の研究をすすめる小林先生からキリスト教という新しい価値観に出会い、神の前では皆平等であることや自由主義であったことから、それを教育に活かしたのではないかという主旨の貴重なお話を聞くことができました。また、キリスト教を通じて人格を良くするという新たな観点や考え方を見つけることもできました。

今回このような機会をいただけたことで、私は「本多庸一」という人物の熱意を実感することができました。彼が手がけた学校の卒業生であること、今も尚学び続けている一員であることを忘れずに、これからも品性や人格を磨き続けていきたいです。

本多記念国際会議場にある本多庸一銅像

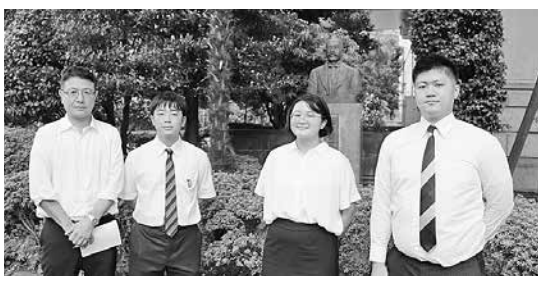
教育と宗教、人格者の礎

看護学部　看護学科３年　横尾　裕樹

青山学院大学を訪問し、弘前学院大学の創立にも深く関わった本多庸一について改めて知ることができました。大切に保管されてきた資料や文献を見学し、先生方に質問を答えて頂いたことで、より学習を深めることができたとおもいます。

本多庸一が、青山学院大学の院長となった際に唱えた理念である「願わくば、神の恵みにより我輩の学校より、いわゆるｍａｎを出さしめよ」は、形を変えつつも現在まで大切にされており、多くの人に影響を与えてきたことを知り驚きました。多くの人が、本多庸一が唱えた理念を展開し、大学という環境の中で学生を人格者として育てていくために、学習や経験を通して品性の統括を行っていくことを大切にしていたと考えることができました。そして、この理念は現在の青山学院大学スクールモットー「地の塩、世の光」にも反映されており、ある時は陰から、ある時は表立って社会に貢献できるような学生を育てる方針であることがわかりました。教育と宗教の二つを両立させ、大学教育を発展させてきたことを改めて感じ、感銘を受けました。

今回、青山学院大学に訪問を行ったことで、本多庸一が大切にしてきた教育と宗教の考えが現在まで続き、多くの人に大切にされていることを体感できました。私自身も、弘前学院大学の理念である「畏神愛人」の下で一人の人格者として成長していけるよう、今回の訪問を生かしていきたいと強く考えました。



間島記念館前の本多庸一銅像

聖愛中学高等学校での授業見学

社会福祉学部　社会福祉学科　准教授　藤岡　真之

高大連携授業の一環として9月12日、13日の２日間にわたり、教職課程の科目を履修する本学の学生が、授業研究として聖愛中学高等学校の英語、国語、社会の授業を見学させていただいた。参加学生数は、英語の教員免許取得を目指す学生が14名、国語の免許取得を目指す学生が８名、社会の免許取得を目指す学生が４名であった。当日は、各授業を見学させていただくと同時に、授業の進め方等について各先生に説明していただき、質疑の時間も設けていただいた。大学で教職に関わる授業を受講し、教員免許取得を目指す学生にとっては、たいへん貴重な学びの機会になったであろうと思う。

以下に、授業の見学をさせていただいた後に実施した、参加学生に対するアンケートの結果をかいつまんで紹介しておきたい。

『『指導案と授業に関する説明』について、あなたが勉強になった程度について以下の中から選んでください」という設問（４択）に対しては、「とても勉強になった」との回答が84％、「どちらかといえば勉強になった」との回答が16％、つづいて『『研究授業』について、あなたが勉強になった程度について以下の中から選んでください」という設問（４択）に対しては、「とても勉強になった」との回答が88％、「どちらかといえば勉強になった」との回答が12％であった。

また具体的な記述には、「授業中の生徒への質問の投げかけなど生徒が発言しやすいように授業環境作りが勉強になった」「国語という科目にどうＩＣＴを組み込むか、読み書きと両立させるために必要なことは何かを学ぶことが出来た」「授業をするにあたって生徒目線を意識しているのが印象的で勉強になった」といったものがあった。

以上の結果は、このたびの授業見学が、重要な学びの機会であったことを示しているであろう。学生たちには、この経験を今後の糧にしてもらいたい。

そして、このような機会を設けてくださった聖愛中学高等学校の先生方には感謝を申し上げたい。

教育を大切にした弘前の偉人

社会福祉学部　社会福祉学科２年　布施　纏

今回私は、この青山学院大学を訪問するということをきっかけに弘前学院の創設者である本多庸一について学びはじめました。インターネットや本などを使い、本多庸一とはどういう人物なのか、そしてどんな活動をし、どのような功績を収めたのかを大雑把に知ることが出来ました。だからもっと本多庸一について知りたいと思いました。

そして青山学院大学訪問当日では、分からなかった本多庸一についてのことや新たに知ることができ、良い機会になりました。まず初めに小林先生から事前に調べたうえで分からなかった点を質問し、本多庸一の人柄や人物像、学校が出来た経緯などを詳しく説明していただきました。学問や人格の向上という教育の指針に沿って行動していたり、自由民権運動の活動もしていて政治的素質もあったが教育の道を選んだり、政治の素質があるからこそ青山学院大学が迎えた学校がなくなる可能性があったときも打開することが出来たということなど様々な知識を得ることが出来ました。次に、青山学院資料センターや礼拝堂を見学することとなり、当時の鎧だったり、キリストのお言葉を書いた掛け軸だったり、当時の学校の写真だったりと多くのことを知ることが出来ました。また、青山学院大学に昔からある礼拝堂を見学したときは、戦争により金属が持っていかれたが十字架だけは守り抜いたエピソードであったり、今でも結婚式などで使われたりすることなども知ることが出来ました。

最後にこの青山学院大学の訪問を終えてたくさんのことを学ぶことが出来ました。この知識は今後使うことは少ないかもしれないですが、この経験を今後に生かしていきたいと感じました。

English Camp を通して

文学部　英語・英米文学科　１年　田中　涼紗

２０２２年度弘前学院大学English Campが８月６日に開催された。今年度は本学院生１０１名と本学教員５名に加え、聖愛高校の学生17名も参加し、学生が数人のグループに分かれて活動を行った。今年始めて聖愛高校の生徒さんが参加した。

今年度のテーマは「ＳＤＧｓ」で、行われた活動内容は以下の通りである。

１．ＳＤＧｓの17項目に関連する様々な問題の解決策をグループ内で話し合う

２．ＳＤＧｓに関するクイズ26問をグループで協力しながら答えを考える

３．ＳＤＧｓ17項目のうち１つをテーマに英語でポスター製作と発表

１つ目の活動では、例えばＳＤＧｓ８「安全な水とトイレを世界中に」の項目に関する事柄で、「水不足の地域で井戸を掘ったら、地盤沈下が起きて家が崩壊しそうになった」という問題について考えるといった活動で、話し合いは多少の日本語を交えながらもほとんどが英語で行われた。言いたいことを英語に直して話すことに苦労したが、先輩方に頼りながら最終的には英語で答えを出すことができた。

２つ目の活動のクイズでは、問題がすべて英語で出題された。グループ内で協力し合い、問題の意味を理解することができたが、答えが分からないものが多々あった。最近よく耳にするようになったＳＤＧｓだが、クイズを通してＳＤＧｓに関する問題をまだまだ身近なこととして理解できていないことを自覚した。

３つ目の活動では、各グループにＳＤＧｓの１項目がテーマとして与えられ、その項目についてポスターを製作した後、全体で発表が行われた。足りない知識はインターネットで補いポスター製作を行ったが、これもまた調べたものを英語に訳しながらの作業で、とても難しかった。しかし、参加していた聖愛高校の学生の活躍もあり無事に完成した。60分という短い製作時間だったが、各グループとても素晴らしいものに仕上がった。

今回私たちが見たり、知ったり、調べたりしたのはほんの一部だとは思うが、ＳＤＧｓの理解を深めることができてよかった。活動を通してＳＤＧｓについて興味を持つ学生が増えていたらいいなと思う。

2022年度 弘前学院大学英語弁論大会

弘前学院大学にて英語弁論大会が２０２２年７月28日に開催されました。弘前学院大学文学部主催で、この大会の目的は、第一に本学学生の英語能力（会話力、文法、文章力）を向上させる事であります。第二に、多くの学生が英語学習に励み、より高いレベルの英語能力を身につける事。また発表者が与えられた課題に対する考えを深め、その考えを分かち合い共に学ぶ事にあります。

今年度は「The Importance of Intercultural Communication（異文化理解）」という題目で、英語・英米文学科３年生、福士さくらさんと前田凌久君の２名の学生が日頃の成果を競いました。出場者は、日本に住む外国人と接する際の文化の違いを理解することの必要性について論じました。また、日本国内でも地域の文化や方言に違いがあることを理解することの重要性を詳しく述べました。出場者たちからのメッセージは、聴衆にとって洞察に満ち、有益なものであったに違いありません。

聖愛高等学校のＡＬＴケン・テホ先生からは内容、英語の流暢性、発音などの観点からコメントをいただきました。二人の出場者ともに金賞を受賞しました。今年も金賞の学生のスピーチは、『弘前学院大学英語英米文学』第47号（２０２３年３月発行予定）誌上に掲載される予定になっております。

奥入瀬、十和田を巡る「文学散歩」

文学部　日本語・日本文学科３年　菅原　彩音

今年度の国語国文学会の「文学散歩」は、十和田湖や十和田市の各所を巡りました。文学者の作品を見るとともに、十和田のアートによるまちづくりについて学びました。

始めは、秋田県小坂町にある、ここさか七滝を見学しました。大館市と小坂町、十和田八幡平国立公園を結ぶ主要地方道大館十和田湖線と呼ばれる観光道路にあります。観光地としてにぎわう十和田湖への中継地点にある「日本の滝百選」に数えられる名瀑七滝を見て、十和田湖への期待を高めました。

次に、十和田湖の乙女の像・十和田神社へ行きました。乙女の像までは想像以上に遠く感じましたが、詩人・高村光太郎の最後の作品は気品あふれるもので、十和田湖の風景と非常に調和しており、感動を覚えました。十和田神社は、森林の中にあり、幻想的で青森屈指のパワースポットといわれる所以を肌で感じました。参加者は、それぞれお参りしたり、おみくじを引いたりとご利益を祈願しました。

奥入瀬渓流では、バスの中から滝や自然を観賞し、各名所を運転手の方に説明してもらいながら進みました。見所が多く、歩いて近くで見てみたいと思いました。また奥入瀬渓流館では、生態系などのパネルや写真、実際の木や石に触れたり、葉を観察したりと各々見学、体験をしました。

最後に十和田市の官庁街通りと十和田市現代美術館を見学しました。官庁街通りやアート広場では、多くのオブジェが配置され、草間彌生や奈良美智などの有名な作品等を見ることができ、感慨深く感じました。美術館は、音声ガイドを使い自由に見て回りました。館内だけではなく、外に出ても至る所に作品が展示されていたので、見所が多く、時間があっという間に過ぎていきました。企画展では、彫刻家の名和晃平の「生成する表皮」を見学しました。視点の移動とともに表面が映像的に姿を変えるシリーズや、シリコーンオイルからグリッド状に泡が生成されては消える作品、規則正しいドットがコードのように並んでいる作品を見学し、感覚や想像力を拡張させる体験ができたのではないかと思います。

今年度は、天気も悪くなく紅葉が進んでいない時期でしたので、観光客も多くなくスムーズに進むことができました。ボリュームのある内容だったので、みんな楽しめた「文学散歩」になったと思います。

チェ・ジョンファ作「フラワー・ホース」の前で

奈良美智作「夜露死苦ガール 2012」

令和４年度 国語国文学会夏季大会 開催される

文学部　日本語・日本文学科　教授　鎌田　学

七月二日(土)十三時から本学礼拝堂にて、令和四年度国語国文学会夏季大会が開催された。密をさけるため入場は学内関係者のみとさせていただいたが、52名もの参加者があった。この場を借りてお礼を申し上げたい。

今年度着任された井上裕太氏が、「我が国における音楽博物館の展開」という題目で、日本における音楽博物館思想について時代ごとの特徴を検証した。

発表冒頭で、博物館における音楽展示は、視覚情報のみでは展示の本質を伝達することは困難であり、楽器の音色や歌声等の聴覚情報を組み合わせて活用するなど、工夫を凝らした内容とすることが求められる、と音楽博物館の固有性を指摘。

次に、井上氏は明治期～現在に至るまでの変遷を以下のように整理した。①博覧会における楽器の品評が主であった明治期、②音楽家の展示にスポットの当たった一九二〇年代、③世界各地の楽器が紹介されるようになった三〇年代、④紹介される楽器が東洋に限定されるようになり、文化的背景とともに紹介されるようになった戦時中、⑤再び世界各地の楽器に焦点が当たるようになった五〇年代～六〇年代、⑥民族音楽にもスポットが当てられるようになった六〇年代～七〇年代、⑦多種多様な音楽博物館が建設されるようになり、地域振興や地域との関係性が重視されるようになった八〇年代以降。

殖産興業政策の一環としての博覧会、大東亜共栄圏を意識した音楽博物館建設運動、ふるさと創生事業を端緒とした博物館建設など、社会影響を大いに受けて、音楽博物館は歴史的に展開していった、と井上氏はまとめた。

発表後は在学生、教員から多数の質問あるいは意見が寄せられ、活気のある大会となった。なお、本学文学研究科二年の佐藤妙香氏による研究発表「倭建命の西討―叔母・倭比売命の援助」も当初予定されていたが、当日体調不良のため会場で発表原稿のみの配布となったことも記しておきたい。